

二〇一八年、立春が過ぎ、空がエステをしたように白くなった。なんだか心まで明るくなる。春になったら何かいいことあるかも。毎年そう思う。が、あったためしがない。それでも春は待ち遠しい。

そんなある日、電話が鳴った。ふるさとの局番だ。誰だろう。「もしもし」「あ、久しぶり元気かいね？」小中学校時代の同級生だった。桜が咲くころみんなで集まるとのこと。彼女は言った。「たまには顔をみたいがね。出ておいでよ」「忙しいけん。ごめんね。」受話器を置きながら長い息を吐く。昔の話をして何がおもしろいのだろう。

奥出雲の小さな盆地で育った。桜だけは有名だった。町内をながれる斐伊川沿いの桜並木は「日本さくら名所百選」に選ばれている。が、ここ数年は見に行っていない。

両親は亡くなった。実家は取り壊した。墓も移した。ふるさとへ戻る理由はなくなった。桜も、遠くで想像するだけになった。それでいい。

父母のことは大好きだった。仲良しの友だちもたくさんいた。お花見も楽しかった。でも、それはもう終わったこと。私は今を生きる。過去を懐かしむなんて、年寄りのやることだと、自分だって年寄りのくせにそう思っていた。

あたたかな風に誘われて車を出す。本屋で立ち読みをする。ふと下に目をやると満開の桜の木があった。あれ、思わず手に取る。斐伊川の写真集の表紙だった。パラパラとめくる。ピンク色のトンネル、ぼんぼりの薄灯り、夜店の裸電球。遠い日の自分がそこにいるような気がした。両親や友だとの笑顔が臉にゆれる。鼻の奥がツーンとしてきた。値段を確認してレジへ急ぐ。家に着くとすぐに同級生に電話した。「同窓会、出ることにしたけんね。土手の桜がみたくなったがね」